

言葉の背骨



河原 多恵子 (かわはら たえこ)

フリーランス/アナウンサー

元HBC北海道放送アナウンサー、2012年2月からフリーランスとして活動。朗読会開催や言葉のワークショップを企画&コーディネート。他、ラジオ番組、各種ナレーション、セミナーコーディネーターなど担当。北海道岩見沢市出身。「言葉のアトリエ★Kukka」主宰。HBCラジオ「多恵子の今夜もふたり言（毎週日曜21：00～21：30）」

<http://www.hbc.co.jp/radio/futarigoto/>

「ママ、びみょう?」。デパートの洋服売り場、コートを選んでいた女性に男の子が話しかけました。あら、大人言葉を知ってる! 「これ、どう思う?」「微妙〜」。日常会話で若者から多く聞く言葉です。自分ではほとんど使わない、しかし、後輩からこう返事をされたら、「はっ?」と、わざわざ聞き返す範ちゅうの言葉になっています(笑)。子どもたちはどこで覚えてきたかと思う言葉を使うことがあります。誰に習ったかと聞くと、「ママが言ってた!」と告げられたら、微妙です…。

何か良いこと、面白いことに出会いたいと願って街歩き、五感を駆使して探検しています。ホンネは業界用語でいう「ネタさがし」なのですが、発見、再認識、再確認することが多く、スクラップ&ビルドが進んだ街並みの変ほうに驚くことも度々。旧友とどこそで待ち合わせをしたが、その場所が今でも存在するか不安。そして、長い年月、この街で過ごしてきたことを実感します。

手袋/gloves

新年になると、日常使う物を一つ新調して自分に気合いを入れる!これが毎年恒例のイベントです。新しくなるのは財布やハンドバッグ、傘など。高級品でなくても十分気合いが入ります。ある年、街歩きで見つけた真赤なスエード製の手袋。ひと目ぼれて「人生の赤い節目にふさわしい(?)」と決断、自分自身への誕生日プレゼントにしました。とても暖かく、はめると勇気と元気の出る不思議な手袋で、この冬も愛用しています。しかし、手袋コレクションを並べてみると派手なものばかり。なくさないよう忘れないよう無意識に選んでいるのでしょう。幼い頃、母親にねだって編んでもらった毛糸の手袋を落として大泣き。こうした経験が効いているに違いありません。きゃりーぱみゅぱみゅ^{*1}の個性的な色づかいにも注目していますので、ますますカラフルな持ち物が増えそうです。ただし、好きな色と似合う色は必ずしも一致しないことを、知人の色彩プロデューサーから教えられたばかりですが…。ところで、世の中を反映する手袋を見つけました。タグを読むと「iPhone/SP対応」。親指&人

*1 女性ファッションモデル・歌手。ファッション雑誌『Zipper』『KERA』『HR』で活動。2011年から商品プロデュースも開始。12年原宿カワイイ大使就任。

差し指に小さな別布がついています。これだと手袋をしたままでスマートフォンなどの操作可能というわけです。残念なことに私は二つ折り派。けれども、財布から小銭を取り出す、ボタンをはずす、コートのファスナーのかみ合わせに手間取るときなど便利だと思います。オードリー・ヘプバーン主演の映画「ローマの休日」にも手袋が登場しました。夜、宮殿から抜け出す王女（ヘプバーン）はブラウスにスカート姿、そして、手には手袋。ローマの休日を楽しむうちに手袋が消え、長袖ブラウスが腕まくりになり、この二つから王女の弾む気持ちが伝わって（勝手にこう解釈）、映画を見るたび、ときめきます。

手袋を数える単位は「双」、また、組・対・足なども。節電の冬。手袋を着用することでセーター1枚分の保温効果があるといわれます。万一転んでも、手袋が手を守ってくれます。くれぐれも愛用の手袋を見失わないよう、出がけには有無の確認をお忘れなく。

言葉のざわめき

ランチタイム、本を読みながら注文したものを待っていると、パーティーで仕切られた向こう側から女性たちの楽しそうな話し声や笑い声がします。若い人は笑えることが沢山あってうらやましいですね。するとそのうち、手を叩き爆笑する声が店内に響きわたってドキッ。声のボリュームを音楽用語に例えると、まさに「クレッシェンド^{※2}」。夢中でしゃべっていると、つい音量を忘れがち。まもなく笑い声が消えて、食事が始まった様子です。昼休みの限られた時間内で「食・話・笑・情報・メイク」、さらに仕事の英気を養うとなれば時間が足りません。今風のテンポで言葉を次々と繰り出す若い世代、ときにはその小気味良さに感心します。「いたきもちいい」。さがし物をする最中に聞いた声に振り向きしました。女子高生数人が何かを試した、その結果が「痛・気持ち良い」。痛いけれども心地好さが上回るという絶妙な言いまわしに、なるほどと思いました。これに似た表現が「痛・寒い」。しばれる日は冷気が頬に突き刺さるように痛いという、地元北海道ならではの感覚です。言葉は生もの、進化し

変形し退化もします。しかし、どんなときも「伝わる言葉」を使っていかなくてはなりません。

会話はキャッチボール

人生で初めて発した言葉は何だろう？もちろん、本人は覚えていませんし、誕生から半世紀以上たっていますから親も覚えていないでしょう。現代なら、子の一挙手一投足に大人は感動、泣いた・笑った・立った・トイレができたと記憶して、ビデオカメラやICレコーダーにも記録します。多分、何かのはずみで出たノイズが自分の第一声かもしれません。ふと浮かんだ疑問、我が人生の第一声は？

さて、会話はキャッチボールです。言葉が相手にどんな届き方をしたのか、無意識に使った言葉が届く相手にどう伝わっているのか。日常、何気なく使った言葉で相手を傷つけたり、逆に傷つけられたりしてはいないか。相手の話を理解してから自分の言葉で自分の考えを伝えること。発するだけでなく、じっくりと「聞く」ことでコミュニケーションが生まれ、豊かな会話になっていくものだと考えています。これを私は「キャッチボール」と呼んでいます。これからも投げ続けたいと願っています。ストライクもあれば悪投もあるでしょう。相手がそれを受ける・投げ返すそのとき、双方でキラんと何かが光ります。その輝きで、私の真ん中にある「言葉の背骨」がコツンと響きます。先日、ハンドメイドの万華鏡を頂戴しました。届いた箱を開けてびっくり。なぜ、私の好きなものを知っているのかと驚きました。言葉も万華鏡のキラキラも無限の組み合わせに魅かれます。共通するキラキラで「心の背骨」もコツンと鳴りました。



愛用の手袋

※2 クレッシェンド (crescend)
だんだん強く。